

海中の 巧みな釣り師 カエルアンコウ

長崎大学が所蔵する『グラバー図譜』の中からクロイザリアップ。とはいえ今回は違う画家による同じ種類の魚が何匹も登場しました。これには訳があるのです。解説は山口敦子教授です。

「皆さん、「カエルアンコウ」という魚をご存じでしょうか。アンコウ目カエルアンコウ科の魚で、沿岸の砂底などでおなじみの小さな魚です。胸鰭を使って海底を這うように移動する姿にちなみ、かつては「イザリウオ」と呼ばれていました。しかし、二〇〇七年に日本魚類学会で魚名についての検討がなされ、「イザリ」は足が不自由な人を指す「蹠」の意味で差別用語にあたると考えられ「カエルアンコウ」に改名されたものです。確かに「泳ぎが下手な魚」と表現されることも多いのですが……、実際は少し違います。別の角度からご紹介しましょう。頭部の先端にご注目ください。誘因突起と呼ばれる吻上棘があります。背鰭の第一棘が長く変化したもので、さらにその先端には二から七本に分岐した皮弁がついています。つまり、長く伸びた釣り竿の先に擬似餌がついたようなもので、これを巧みに

に使い、カエルアンコウは魚釣りをします。海中ではその複雑な体の模様で海底に擬態し、じっと静止した状態でその疑似餌をひらひらと動かすとまるでゴカイが揺れ動いているように見えます。餌に魅せられた魚が近づいてきたところで大きな口を開けると一瞬でバクリ！ 口中に吸い込まれていきます。その捕食時のスピードといったら超高速で、魚類の中でも最速なのだから。こうして泳ぎ回り追いかけて回すこともなく、じっとしたままで実に効率良く餌を食べることができるのです。速く泳ぐ必要なんてないですね。背びれが疑似餌の代わりとは、世の中にはいろいろな魚がいるものです。

体色の変化から 複数の絵が残る

「この一風変わった、ユーモラスな外部形態をもつカエルアンコウの仲間は世界から五十一種、日本周辺からは十五種が知られており、同一種

の中でも形態や色彩に変異が多いことが知られています。例えば、イロカエルアンコウ、という魚では、幼魚と成魚で体色が変わります。さて、話をグラバー図譜に戻しましょう。グラバー図譜には、倉場富



※倉場氏は上段の二図をイザリウオ、下段両端をクロイザリウオ、中央をベニイザリウオと同定した。



解説 山口敦子
長崎大学水産・環境科学総合研究科教授

Atsuko YAMAGUCHI
東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程修了。2000年から長崎大学。専門はエイやサメなど魚類学と水産資源学の研究。主な著書に「干潟の海に生きる魚たちー有明海の豊かさ危機」(東海大学出版)など。

三郎氏がイザリウオと同定したものが二図、クロイザリウオと同定したものが二図、ベニイザリウオが一図、そしてハナオコゼが一図あります。これらの図に描かれた形態学的特徴をあらためて詳しくみてみると、ハナオコゼを除く五図については全てイザリウオ、つまりカエルアンコウと同定して差し支えなさそうです。倉場氏は色彩の違うカエルアンコウを見つけた際にグラバー邸に運び込み、さまざまな画家に描かせたのではないかと推測します。今のところ、このカエルアンコウを食用

とする地域は知られていないのですが、これが当時なぜ長崎魚市場に水揚げされていたのか、偶然、他の魚に混ざっていたのか、あるいは食用として持ち込まれたものだったのか、個人的にはとても興味があります。さて、三名の画家に描かれた色彩や模様の異なるカエルアンコウ五枚の図譜を、それぞれ比較しながらお楽しみ下さい。並べると、お祭り騒ぎの賑やかさです。こうして見ると、同じ魚でも、画家の個性が現れており、また違った見方ができますね。

長崎大学附属図書館のホームページでもご覧いただけます。

<http://oldphoto.lb.nagasaki-u.ac.jp/GloverAtlas/>

「グラバー図譜」は、長崎の実業家であった倉場富三郎氏が編集したコレクションです。日本四大魚譜の一つといわれています。

グラバー図譜 日本西部及び南部魚類図譜

Fishes of Southern
& Western Japan

Glover Atlas

カエルアンコウ

Antennarius striatus